

エレミヤ書17章9－10節 「欺く心を試す神」

1A 心の欺き 9

1B 意志の集積所

2B 無知の自分

2A 心を探る主 10

1B 動機に従った裁き

2B 聖霊による清め

本文

エレミヤ書 17 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、14 章まで来ました。午後礼拝で 15-17 章を読みますが、今朝は 17 章 9-10 節に注目したいと思います。「**9 人の心は何よりも陰陰で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。10 わたし、主が心を探り、思いを調べ、それぞれその生き方により、行ないの結ぶ実によって報いる。**」

エレミヤは、預言者として神の真理をユダの民に伝えていました。その真理に対して、人々が自分たちの心にある深い部分が明らかにされていってしまうので、彼らはエレミヤに反対していきます。ある人は、嘘を付きます。ある人は、エレミヤを責め、中傷します。ある人は、陰で画策してエレミヤを貶めようとしています。こうやって、何もなかったらそれほど悪いことをしているように見えていなかった生活に、エレミヤの語る神の真理の言葉によって、彼らのしている悪があぶり出されていくようになりました。そこで主が語られたのが、この言葉でした。

1A 心の欺き 9

1B 意志の集積所

「**人の心**」について主は語っておられます。

私は、先月 5 月 27 日に、アメリカのオバマ大統領が広島を訪問し、核兵器廃絶に向けてのスピーチを聞きました。それから、核兵器に関わる今の世界情勢についても、改めて思いを巡らせました。いろいろ眺めていくうちに、どんどん浮き彫りにされていくのは、「核兵器」そのものが恐ろしいというよりも、人々が破滅へと自ら向かわしめる、心の動きが恐ろしいと分かってきました。そこで、私は次のような文章を自分のフェイスブックに書きこみました。「核兵器より、恐ろしいもの…それは「罪」だと思う。むしろ人の罪の恐ろしさが、核兵器という破壊能力を持った兵器の中に、目に見える形で少し表れていると感じた。人の罪が、マグマのように噴火しそうになっており、間もなくこの地球を破滅へと陥れるのだと、真面目に感じる。だから、この終わりの日、キリストの十字架をさらに見上げないといけないと思う。そして、この方が戻って来られる日まで、きちんと十字架の言葉を語り、真の平和を伝えることだと思う。」人の罪と書きましたが、言い換えると、「人の心に書

き記されている罪」ということです。争う思い、滅びへと向かわせる思いと言ってよいでしょう。

人の心というのは、とても深いです。箴言には、それを深い水に形容しています。「20:5-6 人の心にあるはかりごとは深い水、英知のある人はこれを汲み出す。多く人は自分の親切を吹聴する。しかし、だれが忠実な人を見つけよう。」物事や出来事の動きを探ることはできても、人の心の動きというのは、何でそうなるのかが分かりません。表面にはなかなか出てこない、海のような深さを持っています。ですから、その一例としてソロモンは、親切にするような口ぶりであっても、忠実な人を見つけるのは難しい、ということを行っています。

聖書では、「心」というのを一言でいうと、「人の意志の集積所」と言えるでしょう。日本語では、心というと「心情」というような、感情と等しく語る時が多いですが、聖書ではそうではありません。「この人は、心は良いのにね。」と言いながら、とても悪いことをしているのであれば、表面的には良いように見えても、心の奥でそのような悪いことをする意思決定をしている訳であり、それを決めている中枢が心であります。私たちは、感情や衝動でしばしば動きますが、では実際は何を心に思っているかは、その人が決めた行動によって分かります。その部分が心です。箴言にも、「4:23 力の限り、見張って、あなたの心を見守れ。いのちの泉はこれからわく。」と行っています。

心は、「なぜ、そんなことをするのですか？」と尋ねられた時に、その回答をする部分になります。なんで自分で、そんなことをしているのか、あるいはしてしまったのか、よくよく考えてみると、確かにこんな思いが自分自身にあったのだ、と気づくこともあるでしょう。また、都合が悪いことであれば、回答しないで黙っていることでしょう。子供の時に、「なぜ、そんなことしたの？」と怒られて、分かっちゃいるけれども、黙っているということがありましたね？大人になっても、ずいぶんやっていると行いますが。

そしてここには、「何よりも陰険で、それは直らない。」と行っています。新共同訳では、「人の心は何にもまして、とらえ難く病んでいる。」と訳しています。口語訳は、「よろずの物よりも偽るもので、はなはだしく悪に染まっている。」と訳しています。つまり、心は自分について、他者に対して偽るものであり、実に自分自身をも偽っているものであるということです。その奥深くにある部分は、あまりにも悪に染まっていて、捉え難く病んでいて、直しようがないということです。直しようがないことについては、エレミヤ書 13 章 23 節にこう書いてありました。「クシュ人がその皮膚を、ひょうがその斑点を、変えることができようか。もしできたら、悪に慣れたあなたがたでも、善を行なうことができるだろう。」クシュ人はエチオピアの人ですが、黒人です。そして豹の斑点もそうですが、変えようと思っても変えられるものではありません。それだけ悪に慣れたので、善を行なうことができないほどになっている、ということです。

ですから、どうしようもなく病んでしまっている、直しようもない心であることを、エペソ書 4 章 17 節以降にこのように書いてあります。「4:17-19 もはや、異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩

んではなりません。彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。道徳的に無感覚となった彼らは、好色に身をゆだねて、あらゆる不潔な行ないをむさぼるようになっていきます。」このように、空しい心、神から離れ、頑なになっている心があります。

しかしここから、神の良い知らせ、福音が始まります。その性質を、神がご自分の聖霊によって、私たちを変えてくださる、ということです。イエスがその罪を負って代わりに死んでくださった、そして三日目に甦ってくださった。そのキリストの教えに従う時に、神の霊が与えられます。そして、内側から新しくされます。そこで、エペソ 4 章の続きはこう書いてあります。「4:22-24 その教えとは、あなたがたの以前の生活について言うならば、人を欺く情欲によって滅びて行く古い人を脱ぎ捨てるべきこと、またあなたがたが心の霊において新しくされ、真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された、新しい人を身に着るべきことでした。」

2B 無知の自分

ところが、人は自分がそこまで悪くないと思っていますし、また思いたいのです。なぜなら、そうした自分を知ることは、あまりにも痛々しい知識だからです。あるいは、自分は自分のことを知っていると思ひこんでいます。けれども、哲学者ソクラテスが「無知の知」という言葉を残しましたね。自分は知らないのだということを知ることこそが、知識であるということですね。それで、詩篇 139 篇でダビデが最後にこう祈りました。「23-24 節 神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。」

自分で自分をごまかしてしまっているために、自分の言っていることと、その歩みの間に差が生じます。言っているのに、生活には出てこないということが起こります。「1ヨハネ 1:6 もし私たちが、神と交わりがあると断言しながら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのだから、真理を行なってはいけません。」自分が罪の中にいるのに、聖書で罪であるとはっきりと書かれていることを行ない続けているのに、「私は祈っているし、聖書も読んでいるし、だから神との交わりがあるのだ。」と言ったら、それは嘘をついていることになります。

そして、人は自分自身が見えていないので、「これは何と酷いことだ。」とある人について話しているのに、自分自身がまさにそれを行なっているということがあります。まさか、自分自身がそんなことをやっているとは思えないという感想を聞きます。けれども、やはり行なっているのです。まだ自分のことを悟っていないのです。「ローマ 2:1 ですから、すべて他人をさばく人よ。あなたに弁解の余地はありません。あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めています。さばくあなたが、それと同じことを行なっているからです。」

イスラエルに、エリシャという預言者がいました。彼がシリアのダマスコに立ち寄っていた時に、

シリアの王ベン・ハダデが病床の中にいました。ベン・ハダデは、この病が直るかどうか、家来のハザエルを遣わし尋ねさせました。エリシャは、答えます。「2列王 8:10 行って、『あなたは必ず直る。』と彼に告げなさい。しかし、主は私に、彼が必ず死ぬことも示された。」そしてハザエルをじっと見つめます。ハザエルが恥じるほどにじっと見つめ、泣き始めます。そしてこう言います。「8:12 私は、あなたがイスラエルの人々に害を加えようとしていることを知っているからだ。あなたは、彼らの要塞に火を放ち、その若い男たちを剣で切り殺し、幼子たちを八裂にし、妊婦たちを切り裂くだろう。」ハザエルは、気の小さい男でした。そんなことできるはずがない、「自分は犬にすぎないのに。」と言っていますが、エリシャは彼に、「あなたはシリアの王になると、示された。」と言いました。そして、ハザエルは翌日、毛布を取ってそれを水に浸し、王の顔にかぶせて、彼を死なせました。そして自分が王となりました。それから、後にエリシャが預言したように残虐行為を働くようになります。

まさか、自分がそんなことをするはずがない、という人がそれらのことを行ないます。自分で自分が分からないからです。それだけ心という海は深く、罪の深さも知っていないからです。

2A 心を探る主 10

そして次に、「わたし、主が心を探り、思いを調べ、それぞれその生き方により、行ないの結ぶ実によって報いる。」と言われます。

1B 動機に従った裁き

主が報いを与えられます。つまり、主は裁かれます。主が裁かれる時は、真実で公正です。それは、「主が心を探り、思いを調べ」とあり、それに基づいて裁かれるからです。心のはかりごと、その動機、人々には見えないところで行っていること、隠れていることにしたがって、神は各人に報いを与えられます。当時のエルサレムは、神殿礼拝の体裁を保っていました。そして最後まで、財宝はエルサレムにありました。また、エジプトとの軍事協力も行なっていました。したがって、表向きは大丈夫そうだったのです。人の目には、正しい、あるいはそれほど悪くないように見えていました。しかし主は、エレミヤによって神に背を向けていることを、はっきりと示されました。16章 17節にはこう書いてあります。「わたしの目は彼らのすべての行ないを見ているからだ。彼らはわたしの前から隠れることはできない。また、彼らの咎もわたしの目の前から隠されはしない。」彼らが行なっていた、隠れていたものを、神は明らかにされて、そして裁きを行なわれます。

人は、往々にして上辺で裁きます。イエス様はそのことを、ユダヤ人に言われました。上辺だけで裁いてはいけないと言われました。しかし、主は、私たちの心を探られます。そして、その隠れた意図も含めて、そこから出てくる本当の行動を裁ばれます。パウロはコリントにある教会の人から、散々、いろいろな批評を受けました。パウロは、「あなたがたによる判定・・・は、非常に小さなことです。(1コリント 4:3)」と言いました。上辺による裁きなど大したことはない、ということです。それよりも、もっと恐れなければいけないのは、神ご自身の報いです。「4:5 ですから、あなたがたは、

主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごともしっかりにされます。そのとき、神から各人に対する称賛が届くのです。」

ソロモンも、隠れているところを明らかにして裁きを行なうことを、伝道者の最後で語っています。「12:14 神は、善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからだ。」そしてイエス様も、「マルコ 4:22 隠れているのは、必ず現われるためであり、おおい隠されているのは、明らかにされるためです。」と言われました。

人はそこで、どうしても人相手にして何かを行なっています。神に対して祈るのではなく、人にどのように聞こえるかを意識しているし、どのように自分のしていることが認められるかを考えながら何かを行なっています。それについて、イエス様は何と言われたでしょうか？「すでに報いは受けました」と言われましたね。「マタイ 6:1 人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から、報いが受けられません。」人にどう思われるかという恐れ、人のことを気にして行なっているものであれば、必ずこの範疇に入ります。人に見せるために、何かを行なっている、あるいは行なっていないのです。こういう時は、神は報いを終わりの日に用意しておられません。

私たちは、裁きを受けなければいけなくなる時に、どのようにして弁明するのでしょうか？自分のことを有体に申し開きすることは、できていないように思います。自分が何かで捕まったとします。例えば、教会の人の財布を盗んだとします。それで尋問を受けている時に、「私が、祈っていると、床に財布が落ちていました。それで、これは私が長年祈っていた金銭的必要がみたされた、神からの答えだと思いました。そして、家に持ち帰って、主に感謝して祈り、お金は使わせてもらいました。」いかがででしょうか？これを、「作り話」と言いますね。少しずつ、自分の都合の良い話を付け足し、また少しずつ、自分に不都合な話は取り除いて話してしまいます。

モーセの兄アロンが、人々の要求に合わせて金の子牛を造った時に、モーセがシナイ山から降りてきて、それを粉々に砕いた後にアロンに問い質しました、「何をしていたのか？」と。するとアロンが答えました。「出エジプト 32:24 それで、私は彼らに、『だれでも、金を持っている者は私のために、それを取りはずせ。』と言いました。彼らはそれを私に渡したので、私がこれを火に投げ入れたところ、この子牛が出て来たのです。」火に入れたら子牛ができたのではないです、のみで型を造りました(32:4)。

2B 聖霊による清め

では、このようにどうしようもない、自分でも分からない、心をどうすればよいのでしょうか？自分では直すことはできません。しかし、私たちの心を清めてくださる神がおられます。私たちが、罪がない、罪を犯していないという偽りを言わないのであれば、神が見ておられるように、罪は罪として

言い表すなら、不義から私たちを清めてくださいます。「1ヨハネ 1:9 もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」ここで大事な言葉が出てきました。私たちは、自分の姿について知り得ないと言いましたが、私たちが知らされている罪を神の前に認めれば、「すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」という、すべての悪を清めていただくのです。

ですから、これは神の御霊による、全く新しい刷新です。「テトス 3:4-5 しかし、私たちの救い主なる神のいつくしみと人への愛とが現われたとき、神は、私たちが行なった義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちを救ってくださいました。」神は私たちを洗ってくださいました。清めてくださいました。

そして神の御霊は、私たちをキリストの似姿へと変えてくださいます。「2コリント 3:18 私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたち姿に変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」御霊によって新しく生まれた者には、神は聖霊によって、私たちがまだご自身に明け渡していない部分、欠けている部分を示されます。私たちはその度に、自分で直そうとするのではなく、そのまま主の前に出て、主の前に言い表し、御霊で自分を満たして下さるようお祈りします。そして、自分自身を御霊にゆだねていくのです。

主は、ご自身が戻って来られる時に、火によって私たちを清められます。「1コリント 3:12-13 もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現われ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。」火によって、ただ主に対して行なったことのみが残ります。その他のものは焼き尽くされても、主にあって行なったことは残ります。そして、終わりの日の前にも、試練というものは火の役割を果たします。「1ペテロ 1:7 信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。」ですから、私たちが試されている時に、主の前にある自分がさらにはつきとします。そうすれば、その中から御霊に自分を明け渡し、そして終わりの日に完全に不純物が火に焼かれて、主ご自身に会うことができます。

どうか、預言者イザヤを思い出してください。彼は、ユダの罪を糾弾していましたが、主の栄光を見て、自分自身が口と唇が汚れていると叫びました。すると御使いが、祭壇からの炭を用意して、それを彼の唇に付けたのです。それで彼は清められ、神に呼ばれて働きを始めました。私たちに、炭火の体験が必要です。自分を知り、主に清められて、主に言われたことを行なっていきます。